

Title	丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査 : 「～ません」と「～ないです」
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪外国語大学論集. 11 p.51-p.66
Issue Date	1994-08-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79641">https://hdl.handle.net/11094/79641</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査 ——「～ません」と「～ないです」——

田野村 忠 温

## A Corpus-Based Study on the Polite Negative Predicate Forms in Japanese

Tadaharu TANOMURA

### I コーパス言語学

欧米では、コーパス言語学 (corpus linguistics) の名のもとに、大規模な電子化コーパス (コンピュータ入力された言語資料) を利用した言語研究が早くから実践されている。中でも英語に関しては、研究者が自由に入手できる電子化コーパスが数多く作成・公開され、それを利用した研究の成果がすでにおびただしい数の論文や書籍として発表されている。<sup>(1)</sup>

これとは対照的に、日本語の研究における電子化コーパスの利用は、はなはだしく立ち遅れた状況にある。この遅れの最大の原因は文字・表記の問題にあったものと想像されるが、いずれにせよ、組織的なレベルでのわずかな研究を除けば電子化コーパスに基づいた日本語研究はごく最近まで皆無であった。しかし、幸い、近年のパーソナルコンピュータのハードウェア・ソフトウェア両面における長足の進歩のおかげで、個人の研究者のレベルでも日本語の電子化コーパスを利用できる可能性がようやく芽生えつつある。<sup>(2)</sup>

電子化コーパスの利用が、従来の言語研究の方法に全面的に取って代わり得るといった性質のものでないことは言うまでもない。けれども、所詮単なる言語資料の1つに過ぎないとして、その可能性を過小評価することもできない。と言うのは、この新しい形態の言語資料の出現により、今まではまず不可能であった様々な種類の研究への道が拓かれるからである。例えば、ある言語形式の用法に関わる統計的な偏りの現象は内省だけでは正確な把握が困難であるが、大量の用例を調査・分析することでその実相が浮かび上がってくる。あえて逆説的な言い方をすれば、デジタルコンピュータの技術を利用することで、文法的か非文法的かという択一を迫る従来のデジタルな文法観を脱し、言語に内在する統計的な諸事実をあるがままに把握するアナログで柔軟な視点に立った研究が可能になろうとしているのである。

日本語研究における電子化コーパスの利用法をめぐるさまざまな問題点については、今後、多

数の研究の実践を通して検討を重ねていく必要があろう。以下においては、電子化コーパスの利用の可能性を探るべく筆者が行った試行的研究の中から、日本語文法の 1 問題に関する調査の結果について報告する。

## Ⅱ 本 論

### 1 問 題

現代日本語の述語の形態に関して、多くの文法書や教科書が以下のような変化表を掲げている。

#### (1) (いわゆる) コピュラ表現

	肯定形	否定形
普通体	本 {だ／である}	本で (は) ない
丁寧体	本です	本で (は) ありません

#### (2) 存在表現

	肯定形	否定形
普通体	(机が) ある	ない
丁寧体	あります	ありません

#### (3) 動詞

	肯定形	否定形
普通体	読む	読まない
丁寧体	読みます	読みません

こうした変化表を見て気になるのは、それぞれの表における丁寧体の否定形のところである。と言うのは、表では「本ではありません」「(机が)ありません」「読みません」という形が挙げられているだけであるが、現実には「本ではないです」「(机が)ないです」「読まないです」という形も用いられるからである。

同じことは過去の言い方についても言える。すなわち、一般には「本ではありませんでした」「(本が)ありませんでした」「読みませんでした」という形だけが挙げられるが、現実には「本ではなかったです」「(本が)なかったです」「読まなかったです」という形も用いられる。

「～ません」「(～ませんでした)」の形だけを認めて「～ないです」「(～なかったです)」の形を無視することは、日本人による文法記述における一種の慣習と言ってもよい。この取捨の背後にあるのは表現の成立順序という通時的事実とそれに基づく規範的意識だと思われる<sup>9)</sup>が、記述的な文法であろうとするのであれば、現実の用法を見もしないで結論を下すのは問題だと言わな

ければならない。また、外国人向けの教科書の場合には、教授・学習上の配慮から文法を単純化して提示しているという事情もあるかと想像されるが、現実によく使われる形を省いてしまっていていいものとは思えない。現に、外国人の書いた日本語の教科書には、「～ないです」の形も併記しているものが多い。

「～ません」と「～ないです」の選択は、表面的な形態の違いという性格が強いとは言え、日本語の文法の骨格に関わる基本的な問題である。遠い過去に由来する記述の慣習に安易に従うことなく、現代における用法の実態をふまえた記述が望まれるところである。

以上のような考えから、この小論においては、「～ません」と「～ないです」が現実にどのように選択されているかということに関して、大規模な言語資料の調査を通してその実態を探ってみることにしたい。

## 2 調査資料

ここで資料として用いるのは、『朝日新聞』の1989年から1992年までの4年分の記事である。1年分の新聞記事を1枚のコンパクトディスクに収めた形のが市販されており、これを用いた。<sup>4)</sup> ただ、付属の記事検索ソフトウェアは日本語の研究の目的には有効に利用できないので、コンパクトディスクから新聞記事を読み出して任意の文字列を検索するソフトウェアを作成し、それによって用例を収集した。記事量は4年分合わせて約460メガバイト（約2億3千万文字）、この分量は400字詰原稿用紙換算で約60万枚、平均的と思われるサイズの単行本の数百冊に相当する。

文法研究の資料として新聞記事を用いることに問題がないわけではない。とりわけ、文体的な偏りの問題は重大である。ここでの調査対象である丁寧体の表現が新聞記事に現れることは比較的少なく、主として、通常の記事における談話の引用、インタビューや座談会の記事、投書などに現れるだけである。しかも、話しことばを文字化した記事の場合、もとの表現がそのまま記録されているとは限らない。記事化の際に省略・補足・言い換えなどの操作が加えられている可能性がある。

そうした問題はあるが、これほどまでに大規模な日本語の電子化コーパスで、一般に入手可能なものは今のところ新聞記事データベース以外に存在しないので、今回は上記の資料だけに基いて調査を行った。

## 3 予備的考察

さて、「～ません」と「～ないです」の関係について考えるにあたっては、少なくとも2つの場合を区別しておく必要がある。

その1つは、「読みません」と「読まないです」のように、「ある」以外の動詞を否定する表現の場合である。これを（記号の順序は前後するが）場合(B)とすると、ここでは、

(4)「動詞（連用形）＋ません」↔「動詞（未然形）＋ないです」

が互いに置き換えられる関係にある。

しかし、動詞「ある」の否定の場合に限っては、

(5)「ありません」↔「ないです」

が置き換えの関係に置かれる。これは、「ある」に否定の助動詞「ない（です）」が付くと「あら  
ない（です）」ではなく単に「ない（です）」になるためであるが、こちらを場合(A)と呼んで区  
別することにする。実際、後の節で見るように、場合(A)と場合(B)とでは「～ません」と「～  
ないです」の選択に関して異なる傾向を示す。

(A)に該当する用例は、そのほとんどが、

(6) コピュラ表現

(7) 存在表現

のどちらかである。(6)のコピュラ表現には、「本では {ありません／ないです}」「大きく {あり  
ません／ないです}」「きれいでは {ありません／ないです}」のような典型的な名詞・形容詞・  
形容動詞文のほかに、「～では {ありませんか／ないですか}！」という複合助辞的な表現（4-  
3-3 参照）も含まれる。また、典型的なコピュラ表現とは多少パターンを異にするが、

(8)「～するまでも {ありません／ないです}」

(9)「～しように {ありません／ないです}」

(10)「ご存じ（では） {ありません／ないです}」

(11)「～しないで {は／も} {ありません／ないです}」

などの表現も同類と見てよいものと思われる。他方、(7)の存在表現には、「机が {ありません／  
ないです}」のように具体物の非存在を言うものに加えて、「聞いたことも {ありません／ないで  
す}」のように抽象的な事物の非存在の表現も含まれる。「いいえ、{ありません／ないです}」の  
ように主語の省略が明白な用例も当然同様に扱う。また、

(12)「～するしか {ありません／ないです}」

(13)「～（とい） ったら {ありません／ないです}」

（例：「情けないったら～」「その痛さといったら～」）

(14)「～する立場には {ありません／ないです}」

(15)「～して {ありません／ないです}」

なども存在表現の一種、ないし、それに由来するものと考えてよいであろう。

唯一、やはり(A)に該当する、

(16)「とんでも {ありません／ないです}」

だけは、もちろん存在表現ではないが、コピュラ表現とも言いがたい。そこで、これはまったく  
例外的なものとして処理することにする。いずれにせよ、(8)～(11)、(12)～(15)、(16)のような表現が用  
例全体に占める割合はきわめて小さく、それらの扱いが以下の分析に影響を与えることはない。

以下、2つの場合の区別に基づき、(A)「ありません」対「ないです」、(B)「動詞+ません」対「動詞+ないです」のそれぞれの関係について順次考察を加えることにする。

#### 4 「ありません」対「ないです」

##### 4-1 用例総数

まず、「ありません」と「ないです」の用例の総数から示すと、(表1)の通りである。「ありませんから」「ないですよ」などのように接続助詞や終助詞が続く用例もすべて含めた数である。

(表1)「ありません」「ないです」の用例総数

ありません	7295	①
ないです	1584	②
計	8879	

(備考)

①1991年版と1992年版には、テレビを通じて流行した「(～じゃ) あーりませんか」という言い回しの用例が計9例見られるが、人工的な表現と考えて統計から除外した。

統計に含めるべきかどうか議論の余地のあるものとしては、ほかに方言の用例がある。しかし、判定の基準を定めるのが困難で、また用例数もごくわずかなので、「ありません」という形の用例はすべて統計に含めた。

②「～ないです」という形をした表現の用例のうち、次の3種類のものは統計から除外した。

(i)「～ない」という形の形容詞の丁寧体

(ii)「動詞(未然形)+ない」の丁寧体

(iii)「動詞(連用形)+てない」(音便形を含む)の丁寧体

(i)については、統計に含めるべきかどうか判断に迷う場合があったが、これについては、「～ありません」という形の用例が資料中に現れるかどうかを判定の基準とした。例えば、「もったいないです」の用例はあるが「もったいありません」という形の用例はない。これは、「もったいない」が(i)、つまり1語化した形容詞であることを意味するものと解釈し、「もったいないです」の用例を統計から外した。「もったいない」以外に、「味気ない」「みっともない」「大人げない」「～きままりない」などを同様に処理した。これらに対し、「とんでもない」「仕方ない」「間違いない」などに関しては、「とんでもないです」「とんでもありません」のように両方の形の用例がある。これらは統計に含めた。

(ii)は「読まないです」のような表現で、これは場合(B)に属する表現であるから5節の分析で取り上げる。

(iii)については事情が少々複雑である。それは、「～してないです」という形は二義的で、「～してあります」の否定である可能性と「～しています」の否定である可能性があるからである。前者の「～してないです」は、動詞「ある」の否定として場合(A)に該当し、「～してありません」と交替可能である。具体例を用いて図式的に示せば、次のような関係にある。

(a) [肯定] ここに名前が書いてあります。

[否定] ここには名前が書いて {ありません/ないです}。

これに対して、後者の「～してないです」は、本来の「～していません」から「い」が脱落したもので、図式化すれば次の通りである。こちらは動詞「いる」の否定であり場合(B)に該当し、ここでの考察の対象には入らない。

(b) [肯定] 今、私は手紙を書いて(い)ます。

[否定] 今、私は手紙を書いて {い)ません/(い)ないです}。

以上のように、「～してないです」という形の用例は場合(A)と場合(B)の両方の可能性があるわけであるが、今回調査した資料における「～してないです」の用例(18例)はどれも後者であったので、(表1)の統計からはすべて省いている。(なお、普通体の「～してない」も同じ理由により二義的である。)

(表1)の統計が示すように、用例の総数で見れば、「ありません」82.2%対「ないです」17.8%と前者の比率がかなり高い。

過去の表現は用例数が少ないが、(表2)の通りである。

(表2)「ありませんでした」「なかったです」の用例総数

やはり「ありませんでした」のほうが優勢で、「ありませんでした」90.3%、「なかったです」

ありませんでした	523
なかったです	56
計	579

9.7%となっている。

#### 4-2 文体的な違い

調査してみるまでもなく、「ありません」と「ないです」とでは明らかに後者のほうがくだけた言い方である感じを与えるように思うが、まずこの印象が正しいことを統計的に確認する。

証拠となる1つの事実は、「～では」「～じゃ(あ)」と「ありません」「ないです」との相関関係である。「～では」と「～じゃ(あ)」のそれぞれに続く「ありません」「ないです」の用例数を調べた結果が、(表3)である。

(表3)「～では」「～じゃ(あ)」と「ありません」「ないです」

	ありません	ないです
～では__	2044 (85.3%)	353 (14.7%)
～じゃ(あ)__	211 (22.4%)	733 (77.6%)

「～では」に続く位置では「ありません」の用例のほうがはるかに多い(85.3%)が、「～じゃ(あ)」に続く位置では逆に「ないです」の用例のほうが多い(77.6%)。過去の言い方の場合についても、用例数は少ないが同様の傾向が見られる。

「では」と「じゃ(あ)」とでは、音変化を被った形である後者のほうが明らかにくだけた言い方である。そして、目下の問題に限れば、組み合わせられやすい要素どうしは共通の文体的特性を持つと考えてよいものと思われる。とすれば、「ありません」に比べて「ないです」のほうがくだけた言い方だという印象は、統計的な裏付けを持つものだということになる。

「ありません」と「ないです」のこの文体的な違いについては、同じ結論を示すと思われる事実がもう1つあるが、これについては後述する。

## 4-3 後続文脈との相関

## 4-3-1 全体の統計

4-1 で見たように、用例全体では「ありません」のほうが「ないです」よりも使用率が高い。しかし、その前後の文脈を考慮に入れて細かく見ていくと、「ありません」と「ないです」の選択は文脈に依存した複雑な様相を呈するものであることが判明する。

まず、「ありません」「ないです」のところで文が終わるか、それともその後ろに接続助詞や終助詞などが続くかといった、後続文脈の種類ごとの用例数の分布を調べてみると（表4）のようになる。

(表4) 「ありません」「ないです」と後続文脈

	ありません	ないです	
___。	5514	73	①
___?	9	0	
___が	479	30	②
___から	152	51	
___し	54	12	
___ので	36	0	
___け(れ)ど	11	8	
___ もの/もん	4	2	
___のに	1	0	
___か	742	1013	③
___よ	162	216	
___ね(え)	101	170	
___な(あ)	7	7	
___わ	6	0	
___ぞ	2	0	
その他	15	2	④
計	7295	1584	

(備考)

- ① 「ありませんっ」という表記の用例1例を含む。また、「ありませんと言った」のような、引用の表現の用例15例を含む（うち、「ありませんてば」1例）。
- ② 「ありませんが～」のように接続助詞の後に表現が続く場合だけでなく、「ありませんが。」のようにそこで文が終わるものや、「ありませんがね」のように終助詞が続くものも含む。
- ③ 「ありませんかね」「ありませんよね」のように、当該の終助詞の後にさらに別の終助詞が続くものを含む。また、終助詞の長短は区別していないので、例えば、「ありませんね」の項は「ありませんねえ」も含む。その他、「ないですか」は「ないですかっ」という表記の用例1例、「ないですな」は「ないですにゃあ」という用例1例を含む。
- ④ 「ありません」については、「\_\_ように」「\_\_でしょう」「\_\_で」「\_\_と(条件)」「\_\_やろか」など。そのほとんどが「ないです」の現れ得ない文脈である。「ないです」については、「\_\_やろ」「\_\_けん」1例ずつと、どちらも方言の用例である。



文末の言い切りでは「ありません」が「ないです」よりも圧倒的に多く（98.7%）、接続助詞が続く場合もやはり「ありません」がかなり優勢である（すべての接続助詞についての総合で87.7%）。しかし、注目すべきことに、終助詞が続く場合は全体的に形勢が逆転し、「ないです」の用例のほうが多くなっている。用例数の多い「か」「よ」「ね」について見ると、それぞれ57.7%、57.1%、62.7%、3つの場合を総合すると58.0%になる。

過去の「ありませんでした」「なかったです」についても、同様の傾向が見られる。

なぜ終助詞が付くときに限って「ないです」の比率が上昇するのか、その理由は明らかではない。しかし、この現象が、古くからよく指摘される形容詞の丁寧体に関わる事実、すなわち、「大きいです」のような形は不自然だが「大きいですね」のように終助詞が付いた形は自然だという事実と共通するものであることだけは確実であろう。

なお、「ないです」の用例全体という観点から見ても、「ないです」に終助詞が続く用例は用例全体の88.8%を占めている。

#### 4-3-2 細かい分析(1) —— 接続助詞が後続する場合

4-3-1で示した統計を2つの観点からさらに詳しく分析してみる。

まず、「ありません」「ないです」に接続助詞が続く場合を取り上げる。4-3-1の統計では、それぞれの接続助詞が後続する用例を一括して扱った。しかし、接続助詞が続くと言っても、それには2つの場合がある。すなわち、「ありませんが～」のように接続助詞のあとにさらに表現が続く場合と、「ありませんが」「ありませんがね」のようにそこで文が終わる場合とである。別の言い方をすれば、その文が主節を持つか持たないかという違いである。

用例数の多い「が」「から」「し」の場合についてその区別を行って統計を取ってみると、(表5)のようになる。

(表5) 接続詞の後の続き方と「ありません」「ないです」

	ありません	ないです	
__が～	436 (94.6%)	25 (5.4%)	
__が(ね)。	43 (89.6%)	5 (10.4%)	①
__から～	49 (84.5%)	9 (15.5%)	
__から(ね)	103 (71.0%)	42 (29.0%)	②

__し～	40	4	
	(90.1%)	(9.1%)	
__し(ね)。	14	8	③
	(63.6%)	(36.4%)	

(備考)

①「\_\_がね」の用例は、43例中4例、5例中1例。

②「\_\_からね」の用例は、103例中30例、42例中16例。

③「\_\_しね」の用例は、14例中5例、8例中1例。

どの接続助詞についても、接続助詞のあとに主節が続く場合と、文がそこで終わる場合とを比べると、後者において「ないです」の比率が高くなっている。「が」と「から」ではそれぞれ5.4%→10.4%、15.5%→29.0%と約2倍、「し」では9.1%→36.4%と4倍になっている。

先に「ないです」が「ありません」よりもくだけた文体の表現であることを確認したが、ここでの統計も同じことを別の角度から示すものと考えられる。なぜならば、主節を持たないということは本来あるはずの表現を欠いた不完全な表現とも言えるので、ことば遣いに配慮を要するような状況では相対的に使われにくいと考えられるからである。したがって、そうした不完全な表現において「ないです」の使用率が上がるという事実は、「ないです」がくだけた文体の表現であることを物語るものだと思われる。

#### 4-3-3 細かい分析(2) —— 「か」が後続する場合

4-3-1の統計でさらに詳しく見てみるべきもう1つの場合は、終助詞「か」が続く「ありませんか」「ないですか」の用例である。と言うのは、否定疑問文は、文法上、性質を異にする2種類のものに分けて考える必要があるからである。筆者はそれらを「甲種の否定疑問文」「乙種の否定疑問文」と呼んで区別しているが、まずこれについて簡単に説明する。<sup>6)</sup>

具体例によって例示すれば、甲種の否定疑問文とは、

- (17) やあ、山田さんじゃ {ありませんか／ないですか}。
- (18) そんなことしたら危ないじゃ {ありませんか／ないですか}。
- (19) だから言ったじゃ {ありませんか／ないですか}。
- (20) やってみようじゃ {ありませんか／ないですか}。

のようなもの、乙種の否定疑問文とは、

- (21) よく見えないけど、あれは山田さんじゃ {ありませんか／ないですか} ？
- (22) この空模様だと雨でも降るんじゃ {ありませんか／ないですか} ？

のようなものと言う。

乙種の「～ではありませんか」「～ではないですか」は通常の疑問文の類に属するもので、もっぱら体言——より正確に言えば、コピュラの「だ」が付くことのできる種類の表現——に続く。

これに対し、甲種の「～ではありませんか」「～ではないですか」は用言にも直接に続くのが著しい特徴で、意味的にも疑いや問いということからはかけ離れたものとなっている。こうしたことから、共時的には、甲種の「～ではありませんか」「～ではないですか」は乙種のそれからは独立した、1つのいわゆる複合助辞と見るのが適当である。これはちょうど、用言にも直接続く「でしょう」を「です」から独立した別箇の形式と見るのと同じことである。

この甲種と乙種の区別に従い、甲種の否定疑問文を、さらに(20)のように「～(よ)うでは {ありませんか/ないですか}」という形をしたもの（これを「甲種Y」とする）と、それ以外の(17～(19)など（「甲種X」とする）とに分けて「ありませんか」「ないですか」の統計の内訳を調べるとほぼ(表6)のようになる（「ほぼ」という限定を付加する理由については後述する）。

(表6) 「ありませんか」「ないですか」の否定疑問文の種別

	ありませんか	ないですか
甲種X	185	307
甲種Y	73	2
乙種	484	704
計	742	1013

用例数の多い甲種Xと乙種については特に注目すべき傾向は見られないが、甲種Y、すなわち、「～(よ)うでは {ありませんか/ないですか}」の形で意志や勧誘を表現する場合だけ、「ないですか」の用例数が目立って少ない。

筆者の自省では、この統計が示すほど「～(よ)うではないですか」という形が使われにくいものとも感じられないが、統計を尊重してその偏りの理由を考えると、これは「～ません」と「～ないです」の意味的な違いによるものなのかも知れない。つまり、ほとんどの場合に同義に感じられる「～ません」と「～ないです」であるが、

(23) a. じゃあ、いっしょに行きませんか？

b. ?じゃあ、いっしょに行かないですか？

という例に見るように——これらは「動詞+ません」「動詞+ないです」の例であるが——、勧誘の表現として「～しませんか」とは言えても、「～しないですか」は不自然だという違いがある。微妙な問題ではあるが、1つの可能性として、規定の事実を云々するのではなく、未来の行動に関する意向などを問題とするような場合には「ないです」は使われにくく、そのために「～(よ)うではないですか」や「～しないですか」が不自然になる、といったことがあるのかも知れない。ただ、5節で見るように「動詞+ないです」はそもそも一般に使用頻度が低いということもあり、結論を得るには判断の材料が不足しているので、これ以上の議論は控えることにする。

なお、(表6)の統計を示すときに「ほぼ」という限定を加えざるを得なかったのは、甲種Xと乙種の用例数について誤差があり得るためである。具体的に言えば、文字で表記された資料では、

「ではありませんか」「ではないか」の用例が甲種Xであるか乙種であるか判断が付かないことがあるということである。例えば、次のような用例についてどちらかに一方の解釈に絞ることは無理である。

(24)権力に対して抵抗も批判もない国、すなわち独裁的政治の行われていた国の腐敗と停滞は歴史が明らかにしています。理念を持って批判し、論理を構築して議論をしていくことにこそ、野党の存在理由があるのではありませんか。

(25)そのときの景気はいまから読み切れませんが、いま不況だからといって、縮こまって何もしないわけにはいきません。未来に向けての投資を着実にやっていくのが経営者の責任ではないですか。うちの場合、資金と人材の配分の関係上、5年ごとに新規投資をしています。

「～ではありませんか!」と見れば甲種X、「～ではありませんか?」と見れば乙種ということになり、両様の解釈が可能である。これが音声の資料であれば音調で判定でき、文字資料でも文脈がもっと与えられていたり「!」や「?」が付いていたりすれば判定の助けになるところであるが、(24)や(25)ではそのような材料がなく、判定不能である。

もっとも、(24)や(25)ほど判定のむずかしい例は少なく、誤差があり得ると言っても高々数例の範囲内だとは思いますが、原理的に解消し得ない種類の誤差であることに変わりはない。こうした事例の存在は、言語研究の資料としての文字資料一般の限界を示すものと言える。

#### 4-4 先行文脈との相関

さて、次に、「ありません」「ないです」と先行文脈との関係について調べてみる。

(表7) 「ありません」「ないです」と先行文脈

	ありません	ないです	①
～で__	2383	1106	②
～く__	364	80	③
～するまでも__	49	0	
～しように__	24	5	
～しないで は/も __	12	4	
ご存じ__	2	2	
～が__	4188	348	④
～しか__	244	37	⑤
～して__	10	0	
{立場/状況} には__	7	0	
～(とい) ったら__	4	0	

とんでも__	8	2
計	7295	1584

(備考)

- ①「～では絶対にありません」「～はほとんどないです」などのように、「ありません」「ないです」の直前に副詞の類が入る用例については、その副詞がないものとして考える。
- ②「～で」だけでなく、「～では」「～でも」「～でしか」などを含む。
- ③「～く」だけでなく、「～くは」「～くも」などを含む。
- ④「～もありません」「～さえありません」のように「が」の代わりに係助詞・副助詞を用いる用例、「そんなことはありません」のように助詞を伴わない用例、「いいえ、ありません」のように主語を省いた用例を含む。ただし、「～しかありません」のような「～しか」の用例は、別扱いとし、ここには含めていない。
- ⑤「～しか」の扱いはむずかしい問題を含むが、ここでは、「～するしかありません」のように動詞を受ける例だけでなく、「名詞+しかありません」の用例もすべてここに含めた。

用例の総数で見れば「ありません」と「ないです」の比率は82.2%：17.8%であるが、用例数の多いところを比較してみると、「～で」に続くときは68.3%：31.7%と両者の差が縮まるのに対し、「～が」に続くときの比率は92.3%：7.7%と両者の開きが大きくなっている。つまり、存在表現では「ないです」は相対的に使われることが少ないということになる。しかし、次に見るように、このあたりの事情は実際にはもう少し複雑なようである。

#### 4-5 先行文脈・後続文脈との相関

4-3と4-4では、「ありません」と「ないです」の使用状況を、それぞれ、後続文脈、先行文脈という観点から調べてみたわけであるが、原理的には、先行文脈・後続文脈の組合せという観点から細かく場合分けして分析して見る必要がある。

そこで、前後の文脈の組合せごとの「ありません」「ないです」の用例数を調べてみたところ、用例数の分布にいろいろな偏りは見られたが、特に有意味と思われるような傾向整は見出せなかった。分布の偏りの1例を示すと、上述した存在表現「ありません」「ないです」の場合、後続文脈によって用例数の分布に違いがある。用例数の多い部分だけを示すと（表8）のようになる。

(表8)

	ありません	ないです
～が__か(乙種)	247	30
～が__よ	103	129
～が__ね	71	120

同じ存在表現でも、後続文脈が「～か」(乙種)であるのか、「～よ」「～ね」であるのかによって、用例数の分布に違いが見られるわけである。しかし、残念ながら、この種の事実に対して今回は確実な解釈を与えるには至らなかった。将来の検討に委ねたい。

## 5 「動詞+ません」対「動詞+ないです」

## 5-1 用例総数

「動詞(連用形)+ません」と「動詞(未然形)+ないです」の用例の総数は、(表9)の通りである。「ありません」「ないです」の場合と同じく、接続助詞や終助詞などが続く用例も含めた数である。

(表9) 「動詞+ません」「動詞+ないです」の用例総数

動詞+ません	16631	①
動詞+ないです	268	②
計	16899	

(備考)

- ①「動詞+ません」以外の形の用例、例えば、「～していません」の変化形である「～してません」や、方言の「動詞+まへん」などは統計に含めていない。  
 ②①と同様の基準により、「～してません」の変化形「～てないです」(これについては(表1)の備考②を参照)などは含めていない。

「ありません」と「ないです」の用例数の比率は82.2%対17.8%であったが、「動詞+ません」と「動詞+ないです」の比率は98.4%対1.6%であり、「動詞+ないです」の比率の低さが著しい。厳密には、「動詞+ません」の用例中には、「おりません」「ございせん」「致しせん」「申しせん」など、「動詞+ないです」の形ではまったく(ないし、ほとんど)使われないものが計約400例含まれているが、それらを除いたとしても98.4%対1.6%という比率は変わらない。

過去の「動詞+ませんでした」と「動詞+なかったです」については、(表10)の通りである。

(表10) 「動詞+ませんでした」「動詞+なかったです」の用例総数

動詞+ませんでした	1676
動詞+なかったです	32
計	1708

両者の比率は98.1%：1.9%である。なお、「動詞+ませんでした」の用例数は、「おりませんでした」「ございませんでした」などの用例30例を含んでいる。

## 5-2 後続文脈別の統計

後続文脈の種類ごとの「動詞+ません」「動詞+ないです」の用例数の分布は、(表11)の通りである。

(表11) 「動詞+ません」「動詞+ないです」と後続文脈

	動詞+ません	動詞+ないです
__。	12020	18
__が	1296	4
__から	323	21
__し	112	3
__ので	86	0
__け(れ)ど(も)	55	10
__もの	19	7
__のに	2	0
__か	1583	12
__よ	514	101
__ね	482	89
__な	44	2
__わ	20	1
__ぞ	4	0
その他	71	0
計	16631	268

①

(備考)

①「\_\_よう(に)」「\_\_でしょう」「\_\_で」「\_\_やろ(う)」など。そのほとんどが、「動詞+ないです」の現れ得ない文脈である。

この統計が示すように、「動詞+ないです」の比率は、終助詞が続くときでもかなり低い。これは、終助詞「か」「ね」「よ」が続くときは形勢が逆転して「ないです」の用例数のほうが多くなる、「ありません」対「ないです」の場合と対照的である。

なお、統計は省略するが、過去の「動詞+ませんでした」「動詞+なかったです」も、「動詞+ません」「動詞+ないです」と同様の傾向を示す。

### 5-3 先行文脈別の統計

「動詞+ません」「動詞+ないです」とその先行文脈——すなわち、動詞の種類——との関係についても統計をとってみたが、特に有意味な相関関係は認められなかった。ちなみに、用例数の合計が1000例を超える動詞について「動詞+ません」「動詞+ないです」の用例数を示すと(表12)のようになる。

(表12)

動詞	～ません	～ないです
いる (居)	1718	22
知れる	1600	10
なる (成)	1571	10
できる	1326	16
する (為)	1003	11

## 6 おわりに

以上、電子化コーパスを利用した日本語研究の可能性を探る目的で行った試行的研究の中から、「～ません」と「～ないです」の選択の実態に関する調査・分析の結果について述べてきた。全体的な用例頻度の比率、文体との相関、終助詞の有無との相関、場合(A)と(B)とでの相違などについて、用例の実態を統計的に確かめることができた。しかし、単純な問題ながら、分析は事前の予想をはるかに上回る苦労や困難を伴い、分析の不徹底なところも残った。<sup>6)</sup> 今後も引き続き、日本語文法の諸問題の解明に電子化コーパスを利用する可能性について様々な角度から検討を加えてみたいと思う。

## 注

- (1) Lita Taylor *et al.* 'A survey of English machine-readable corpora' (Stig Johansson *et al.* (eds.) *English Computer Corpora*, Mouton de Gruyter, 1991)では、大小合わせて36種類の電子化コーパスが紹介されている。また、Bengt Altenberg 'A bibliography of publications relating to English computer corpora' (*ibid.*)には、600件を超すコーパス言語学の研究文献が挙げられている。
- (2) 個人レベルで電子化コーパスを利用した日本語研究としては、後藤齊氏「『神話』の比喩的用法について——コーパス言語学からのアプローチ——」(『東北大学 言語学論集』第2号、1993年)、近藤泰弘氏「文法研究における大量言語データベース——副助詞研究を例にして——」(『武蔵野文学』40 (武蔵野書院、1993年)、荻野綱男・塩田雄大両氏「朝日新聞データベースを利用した言語研究」(『日本語学』第13巻第5号、1994年)などが発表されている。
- (3) 今泉忠義氏「現代語の性格」(三教書院、1944年、191～208頁)は、「だまつて遊びに行つちやいけなですよ」のような言い方が、東京の新興住宅地に住む地方出の母親の口からよく聞かれるものだとし、「です」の流行についての思いを縷々述べておられる。このほか、「～ないです」という形の問題に関係した文献としては、辻村敏樹氏「面白かったです・面白いでした」(『口語文法講座3 ゆれている文法』、明治書院、1964年)、同氏「『です』の用法——近世語から現代語へ——」(『近代語研究 第一集』、武蔵野書院、1965年)がある。
- (4) 『朝日新聞記事データベース (CD-HIASK)』1989年版～1992年版 (日外アソシエーツ)。
- (5) ここでの説明は、「ありませんか」「ないですか」で終わる否定疑問文に話を限定する。詳しくは、拙論「否定疑問文小考」(『国語学』第152集、1988年)を参照していただきたい。
- (6) 用例の計数を始めとして様々な処理のために多数のプログラムを作成して利用したが、そうした機械的な処理が完全には通用しない場合が予想以上に多かった。例えば、「～ではありません」という形のコピュラ表現の用例を抽出しようとしてもプログラムは「～は今ではありません」「～まではありません」「振りそではありません」のような存在表現まで拾ってしまうし、「歌ってない」という用例があったとしてもその「歌」が動詞の一部なのか名詞なのかは文脈を読まないことには決定できない。そうしたことから、分析の多くの局面において、得られた膨大な用例のすべてに目を通すという作



#### 丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査

業を避けられなかった。また、計2000例に近い「ありませんか」「ないですか」の用例の1つ1つについて、必要に応じて広範囲の文脈を参照しつつ否定疑問文の甲種・乙種の別を判定するのは実に骨の折れる作業であった。

(付記)

本研究は、平成4年度および同5年度の文部省科学研究費補助金（奨励研究(A)）の助成による研究成果の一部である。

(1994年5月10日 受理)